経済土木委員会

視察地　①青森県八戸市（５月 12 日）　②岩手県二戸市（５月 13 日）
テーマ　①中心市街地の活性化及びまちづくりについて
　　②公民連携事業及び漆振興事業について


視察研修の様子（八戸市）

①八戸市の中心市街地は、商業のまちとして機能してきた歴史を有しているが、商業施設の郊外化の動きが加速するなど社会情勢の変化を受けて空洞化が深刻な課題となった。こうした状況を踏まえ、中心市街地を商業の拠点だけではなく、社会的、文化的活動の拠点として位置付け、公共施設の整備を戦略的に進めた。また、「人が主役」のまちづくりを推進するとともに、地域資源の有効活用、様々な主体の参加による取組を推進し、次世代につなぐ中心市街地を目指して、官民一体となって検討を進め、中心市街地の更なる活性化に向けて取り組んでいた。

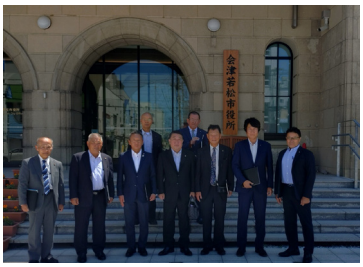

視察研修の様子（二戸市）

②二戸市では、市の魅力的な文化や伝統、特産品などを「宝」として捉え、市民と一体となって「宝」をいかしたまちづくりに取り組んでおり、イベント等の実施や特産品開発が行われるなど一定の効果が得られている。また、次世代につなげる取組として、民間力を活用した公民連携まち再生事業を市内の３つの重点地区において展開している。さらに、漆の生産が非常に盛んであり、地域の特産品でもあることから、地域おこし協力隊制度を活用した人材育成に取り組むとともに、民間企業等と連携した 漆林の整備や植栽を実施するなど、地域の特産品の振興に取り組んでいた。

議会運営委員会

視察地　①福島県会津若松市（７月７日）　②福島県郡山市（７月８日）
テーマ　①議会基本条例に基づく議会改革の取組について
　　②市民との議会報告会・意見交換会について

①会津若松市議会では、主権者である住民の意見を政策に変換する独自の政策サイクルをつくり上げている。議員自らが班を編成して準備・運営を担うとともに、そこで出された多様な意見を広報広聴委員会で整理・分析し、解決すべき政策課題として各委員会へとつないでいく組織的な流れが確立されていた。さらに、外部評価者等の意見を積極的に取り入れ、自らの活動を客観的に振り返り、議会改革の質を絶えず高めていく仕組みが構築されていた。


会津若松市役所にて

②郡山市議会では、開かれた議会を目指し、広聴広報委員会を中心に市民と議員が直接対話する議会報告会・意見交換会を行っている。そこでは、手話通訳の導入や託児環境の整備により、多様な層の声を直接聴く体制を構築し、また、若年層への主権者教育として、模擬選挙や人気作品を活用したリーフレットによる議場見学を実施し、議会への関心向上につなげていた。優秀賞を受賞した市議会だよりの発行や議会モニター制度など、広報と広聴の両面から市民の声を市政に反映させる一連の仕組みにより、議会の活性化を図っていた。


視察研修の様子（郡山市）

広報委員会

視察地　①新潟県加茂市（７月 28 日）　②新潟県燕市（７月 29 日）
テーマ　議会広報紙について


視察研修の様子（加茂市）


視察研修の様子（燕市）

①加茂市議会では、従来の形式的な議会だよりから脱却し、市民の関心に焦点を当てた紙面改革を進めている。具体的な取組としては、一般質問の記事において議事録の要約という機械的・形式的な内容にならないよう、Ｑ＆Ａの要約だけでは伝わらない意図を示すことを目的として「議員の質問意図」欄を掲載している。また、ＹｏｕＴｕｂｅを活用し、議員の個性が見て取れるような動きのある動画の積極的な発信など、市民が議会に関心を持ち、親しみを感じることができる工夫に取り組んでいた。
②燕市議会では、「読みやすく、わかりやすく、親しみやすい」議会だよりという編集方針を掲げ、手に取ってもらえる、手に取りたくなるような目新しいインパクトのあるデザインをコンセプトとし、会議録センターのプロの視点を効果的に活用することで、余白・表紙デザイン・フォントの緩急・写真の配置などの「伝わるレイアウト」を徹底し、全国から多数の議会が視察に訪れる高い完成度を誇っている。また、裏表紙の市民登場企画では、「市民の声」を掲載しており、従来の堅い議会のイメージを払拭し、市民との距離を近づける「自ら創る議会広報」として極めて有益なモデルであった。

総務企画委員会

視察地　①岩手県北上市（８月４日）　②岩手県滝沢市（８月５日）
テーマ　①「あじさい都市きたかみ」について
　　②ビッグルーフ滝沢について

①北上市は、「あじさい都市きたかみ」を将来像に掲げ、拠点とネットワークでつなぐ「多極集中連携型」のまちづくりを推進している。最大の特徴は、積極的な企業誘致による「ものづくり産業」の集積である。現在 11 の工業団地に約 300 社が立地し、製造品出荷額は県内第２位を誇り、強固な財政基盤を築いている。特筆すべきは若者の人口動態で、豊富な雇用機会を背景に、就職期に若者が再び戻る、あるいは新しく転入する「還流」が起きている。産業の力で若者を惹きつけ、定着させる先人的な投資と、住民の愛着を醸成する共助の仕組みを両立させた、持続可能な地方都市モデルである。
②滝沢市の「ビッグルーフ滝沢」は、岩手山の稜線をイメージした大屋根が特徴の複合施設で、コミュニティセンター、図書館、産業創造センターの３エリアで構成され、災害時には避難所として機能する。市制移行に伴い、分散していた人口をつなぎとめ、市街地拠点を形成する目的で整備された。運営面では指定管理者制度を導入し、施設利用料や物販等の収益を確保しつつ、収益の 15％を市に納付する仕組みを構築している。


視察研修の様子（北上市）


視察研修の様子（滝沢市）